しと存候べく候、日月いづれも同前たるべく候哉候べく候、

一我等事不思儀に嚴島を大切に存る心底にて、年月信仰申候、さ候間初度に折敷はたにて合戰之時も、既はや合戰に及候時、自嚴島石田六郎左衞門御久米卷數を捧げ來候條、さては神變と存知、合戰彌すゝめ候て勝利候、其後嚴島要害爲普請、我等罷渡候處に、存外なる敵舟三艘與風來候て、及合戰數多討捕頸、要害之麓にならべおき候、其時我等存當候、さては於當島彌可得大利奇瑞にて候哉、元就罷渡候時、如此之仕合共候間、大明神御加護も候と心中安堵候つ、然間嚴島を皆々御信仰肝要本望たるべし

一連々申度事由候、今度之次に申候にて候べく、候是より外に我々腹中何にても候へ、候はず候、たゞ是まで候べく候、次ながら申候て本望只事候べく候、目出度候べく候、恐々謹言、

霜月廿五日　　元就御判

隆景
元春　　進之候

〔常山紀談十六〕小早川隆景遺訓して、輝元〇毛利を諫められし中に、毛利家五十餘郡を領し、富貴誠に溢れたりといふべし、此より後、苟にも國を貪る心あらば、忽滅ぶべきよと、いましめられしに、輝元、隆景の戒を忘れ、果して國を削られたりき、

〔藩翰譜十上小出〕初め太閤〇豐臣秀吉小出播磨守秀政、片桐市正且元を以て、秀賴の御傅になさる、蔑じ給はん際に臨て、彼の二人を御枕近く召されて、いかに汝等承れ、吾家の天下は、我一日も世に在らん程ばかりぞ、吾失せなん跡は、亡びんこと遠きにあらず、斯く世に在らん程、我家亡びざらん事を計らんとするに、本朝の災また立所に在りぬべし、彼を思ひ此を計るに、此七年が程、朝鮮を討ち、大明と戰ひ、兩國に仇むすびし事こそ、吾が一生の不覺なれ、我なくなりなん後、彼國に向ひし